

労働時間管理とホワイトカラー労働

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2013-11-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 兼一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16242

労働時間管理とホワイトカラー労働

黒 田 兼 一

1990年代バブル経済の崩壊以降、規制緩和政策の進展で労働法制が大きく変化した。いわゆる「労働ビッグバン」である。それに伴って企業における人事労務管理も大きく変わった。雇用の多様化（＝雇用問題）、成果主義（＝人事賃金管理問題）、裁量労働（＝労働時間管理制度問題）の導入と普及等である。これらの変化は、労働法制の変化に対応するためというより、企業経営環境の変化に対応するためであることは言うまでもない。むしろ経営環境の変化に対応するために労働法制の規制緩和が進められたのである。その経営環境の変化とはICT化とグローバリゼーションである。

このような認識に立って、本研究は、近年の人事労務管理の変化を労働時間管理の分析を通して明らかにしようと考えた。また上記のICT化とグローバリゼーションがホワイトカラーの労働にどのような影響を与えたのか、この点を明らかにすることがもう一つの目的であった。換言すれば、ホワイトカラー労働の変化を見据えながら労働時間管理の変化と実態を解明しようというものである。

これまで筆者は自動車産業を中心に調査研究をしてきたが、本研究では電器産業を中心に調査することとした。韓国や中国、台湾などアジア諸国を念頭におけば自動車より競争が激しいと予想できるし、また技術的にも変化が激しいと思われるので、それだけにホワイトカラーの労働実態を浮き彫りに出来ると考えたからである。研究開始の初年度（2008年）において、まず先行研究と各種資料収集に集中する一方で、関西地区のいくつかの電器メーカーを訪問しインタビューを含む調査をおこなった。前者の収集資料を使って二つの研究成果を発表した。

「ホワイトカラー・エグゼンプション制度は時代の趨勢か」木元進一郎監修『人間らしく働く』
127-146頁（2008年10月、泉文堂）

「労働時間管理とディーセント・ワーク」黒田兼一他編著『人間らしい「働き方」・「働かせ方」』、
81-103頁（2009年4月、ミネルヴァ書房）

だが肝心の電器メーカーの実態調査に関しては思うようには進まなかったもので、二年目にあたる本年度も再度企業訪問してフォローアップを試みた。いくつかの重要な情報は得られたものの、しかし意図通りの分析視点から研究課題をまとめ上げるには至っていない。その最大の原因は2008年秋以降のサブプライムローンの破綻を契機とする経済恐慌である。これらは時間管理に対してよりも人事・処遇管理への影響が大きい。調査分析の対象を広げる必要がある。今後も継続して調査を進めるつもりである。